

番号・課題名	2 八丈富士牧野における草地造成試験 ～緑豊かな牧場づくり～
所属・氏名	三宅分場 ○太田久由 八丈支庁産業課 安池朋代 八丈町役場 小野高志・沖山正秀 応用技術部 会田秀樹

〔目的〕

伊豆諸島には現在全島避難中の三宅島をはじめ、大島、八丈島など火山からなる島が多い。これらの島々には公共牧場があり、農家から受託した牛を育成している。しかし、公共牧場の土壌条件は火山島であるため、必ずしも良好とは言えない。雑草が侵入して荒廃した牧区や、礫が表面に露出して裸地になっている牧区も見られる。

このような状況のもと、13年度に八丈島において、礫が表面に露出して裸地となった斜面にマクロシードペレット（MSP）の有効性を検討したところ、傾斜の差にかかわらず発芽、成長することが確認された。14年度はさらにシバポット苗移植法を追加してMSPとの比較を行ない、八丈島富士牧野裸地有効利用についての検討を試みた。

〔方法〕

シバ苗は八丈富士牧野に自生しているノシバを採取し、長さ7～8cm、3節以上含まれるように切り取った。移植するポットは1セルの縦・横・深さがそれぞれ5cmで、富士牧野周辺の土を柵目2mmの篩にかけ、保水・保肥剤（バーミキュライト）を適量まぜあわせたものを入れた。切り取ったシバ苗を2節以上土中に埋めて、毎日の灌水を行なった。シバの根が活着したところに園芸用肥料（NPK10・10・10）大粒を1セルにつき1～2粒程度播き、約2ヶ月間育苗した。育苗した苗は八丈富士牧野第15牧区に造成した試験区（16㎡）に1㎡あたり2～8苗ずつ移植した。

シバポット苗の育苗から移植までの作業はシバポット苗育苗マニュアルにもとづき、秋育苗法を採用し、14年9月に育苗開始、11月に移植を行なった。

MSPは定法に従って牧草用固形肥料大粒（NPK7・7・3）に澱粉糊をまぶし、牧草種子を張りつけた。牧草は秋播きのオーチャードグラス（ナツミドリ）、トールフェスク（サザシクロス）、赤クローバ（マキミドリ）の3種混合種子60gを用い、1㎡あたり4個ずつ播種した。

対照区には上記と同様同量の種子を散播し、シバポット苗、MSPとの成長性を比較した。

〔結果〕

シバポット苗は、移植した2ヵ月半後の1月下旬には半分程度が枯れたように見えた。しかし日中の気温が上がり始めるとともにシバの定着が確認された。4月下旬の定着数は移植した56ポットに対し48ポット（85.7%）となっている。しかし匍匐茎の伸張は思いのほか悪く、数センチメートル伸びたにすぎなかった。

MSP播種後に確認ができた61個のうち58個から発芽が確認された。4月下旬時点での平均自然草高は27.0cm、試験区面積に対する牧草の被植率（被度）は11.0%であった。

散播区の平均草高は18.2cm、被度は15.0%であった（写真1～6、表）。

〔考察〕

今回はシバポット苗の育苗状況が思わしくなかったため、移植後の匍匐茎の伸張が悪かったと考えられた。今後は育苗方法の改善（育苗場所育成ポット等）が必要であると思われる。MSPは発芽・生育はするので、被度確保のための播種密度の検討が必要である。

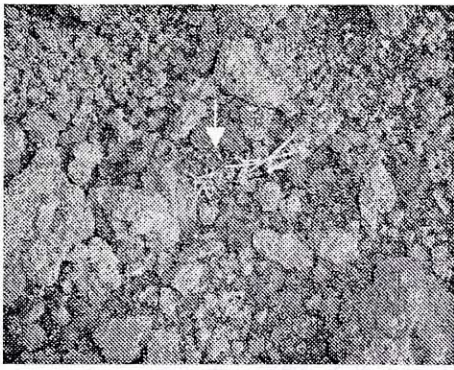


写真1 シバポット (11月)

⇒

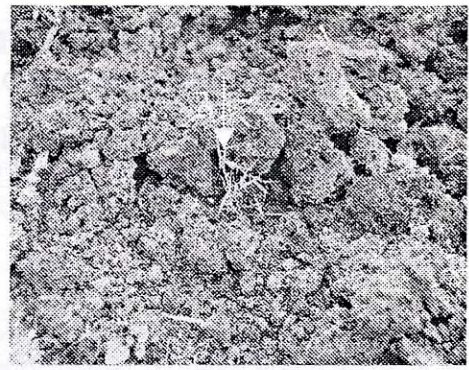


写真2 シバポット (4月)

匍匐茎の伸張はほとんどみられなかった。

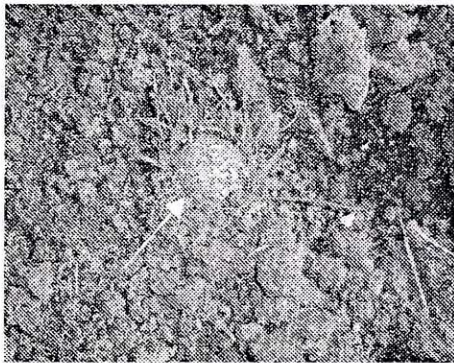


写真3 MSP (11月)

固形肥料のふちから発芽している。

⇒



写真4 マクロシード (4月)

平均草高 27.0 c m



写真5 散播 (11月)

発芽が確認できる。

⇒

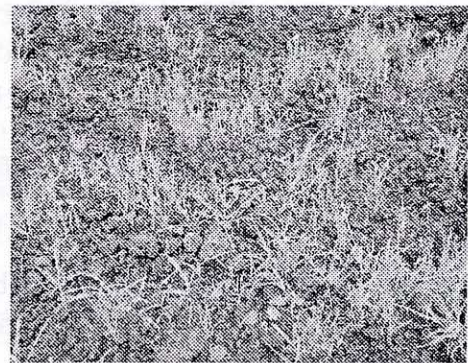


写真6 散播 (4月)

平均草高 18.2 c m

表 各区の育成状況

試験区	自然草高 (匍匐茎伸張)	被度
シバポット	5 c m以下	5 %以下
MSP	27.0 c m	11.0 %
散播	18.2 c m	15.0 %